2021(令和3)年度　御命日法要　【４月】

みなさん、ようこそのお参りでございます。法話にかえまして、今日は、昨年の４月にもお示しさせていただきました 2015 年 4 月 10 日本願寺新報に**『新学期を迎えて。子どもたちの成長を願う』**ということで掲載された 本願寺派保育連盟 教育原理委員長 丁野恵鏡（ようのえきょう）さんが記された**『お父さん、お母さんへのメッセージ』**をご紹介させていただきます。

丁野さんは、滋賀県長浜市にある本派のお寺（龍本寺）の前住職でもあります。

さて、チューリップが、春の日差しを受け、精いっぱい咲き誇っている中、中学・高校の新入生を迎え、そして、在校生がそれぞれに進級しました。はじめて出遇う友達、先生、教室や机、何もかもが、真新しい出遇いの始まりです。

保護者にとっても、子どもの成長は何よりの喜びです。しかし反面、子どもが大きくなるにつれ、不安もまた大きくなってきます。明朗快活な成長には、親が子どもにかける幼児期からの深い愛情と、子どもの親に対する絶対的な信頼が大切ですが、それは、家庭の宗教的な環境によって育まれるといっても決して過言ではありません。

それでは「真（まこと）の教育」とは何でしょうか。

浄土真宗本願寺派の保育連盟が掲げる「子どもの『まことの保育』」の四つの柱が、幼児期だけではなく中高生を持つ保護者や宗門校に勤める私たちが大切にしなければならないことが掲げられていますので、ご紹介します。

先ず一つ目の柱は、母親の胎内から「おぎゃー」と赤ちゃんが生まれた時、その赤ちゃんにだれも難しい注文をつけたりはしません。「そのままでいいよ」と、一つのいのちの誕生を喜び抱きしめます。しかし、赤ちゃんが少し大きくなると、すぐに他人と比較したり、また区別や差別をして、子どもの平等のいのちが見えなくなっていくのです。

阿弥陀さまのまなざしは、一人ひとりのいのちを平等に見ておられます。そして誰一人見捨てることなく、全てを等しく救いとってくださるのです。

子どもが「お母さーん」と呼ぶのは、こころの中のお母さんが子に呼ばしめているからです。それと同じように、私が「南無阿弥陀仏」と如来さまのお名前を称えるのは、こころの中の如来さまが「私の名を呼んでくれよ」と、私に呼ばしめてくださるのです。

阿弥陀さまは、目には見えませんが、常に私に寄り添い、共に悲しみ共に喜んでいてくださいます。朝夕家族そろって　**手を合わせて阿弥陀さまを拝む**　生活をしたいものであります。

二つ目の柱は、一粒のお米ができるまでには太陽や水、土など自然の恵みがなくてはなりません。多くの労働力もいります。私たちはそのお米のいのちをいただいて生きています。しかし、ややもするとそうしたことをすっかり忘れ、あたり前であるかのように日常を生き

ているのではないでしょうか。静かに自己を省みますと、多くの生きものの犠牲と、自分以外の目には見えない大きなはたらきによって **生かされている** ことに気づかされます。あたりまえと生きている私は、決してあたりまえではなかったのです。

「ごめんなさい」と自己を省み、**「いのち」ありがとう** と精一杯いのちを輝かせ、社会のために自分のできることを奉仕する生き方を目指したいものです。

三つ目の柱は、人間は自己中心の物差しで他人の話を聞いてしまいます。子どもは自分が見たり聞いたりした感動を、信頼する大人に聞いてほしいと思っています。ところが大人は、「子どもは幼稚であり未完成であるから」とか、「将来のために正しい指導をしなければならない」などと、子どもの話を十分聞かないで、一方的に自分の思いや考えを子どもに押しつけたりします。その結果、子どもが感動したこと、想像や夢が壊され、かえって子どもの心に欲求不満が沈殿してしまいます。

これも、何も幼児期に限ったことではありません。中学生や高校生も一緒です。親や先生に相談しても、結局は自分の考えを押しつけられ、諭され、その生徒が本当に悩んだり苦しんだりしていることに気づかないことってありませんか？ 大人としての経験値からわかったようなことを言ってませんか？「あなたの気持ちわかる、わかる」って、他人の気持ちなんて本当のところその本人にしかわからないのではないでしょうか。

子どもと真剣に向き合い、子どもの話にじっと耳を傾けて、できればそのつぶやきを書きとどめることも心がけるべきです。大人は子どもの感性にはっと気づかされ、新しい自己を発見します。まさに **子どもの話に自己を聞く** ということです。大人にとって、子どものつぶやきは、阿弥陀さまのつぶやきでもあるのです。

最後の四つ目の柱は、子どもは大人に比べてはるかに純真です。大人は「疑ってはいけない」と言われても、容易に信じることができません。裏切られたり、だまされた経験もあるからです。しかし、子どもは、小さければ小さいほど経験が浅く、従って裏切られた経験もなく、なんでも無条件で信じます。生まれたばかりの赤ちゃんは、無意識のうちに母親や周りの大人を受け入れ、全面的に信じて生きています。信じなければ生きられません。だから、赤ちゃんの瞳は澄みきって感動的です。そして、大人は、子どもの無心な姿に心が洗われ、生きる活力をもらうのです。

大人は、子どもを仏の子として敬わなければなりません。互いに敬い助け合い、そしてつながりあって、仲良くすることの素晴らしさを感じて子を育てる、そして、互いに育ち合っていくのです。

私たち宗門校の教職員は、**子どもを〝仏の子〟として敬っていく** ことが大切なのだと思います。そんな中で生徒たちは安心して学校生活が過ごせるのだと思っています。

毎月の御命日には、お時間の許す限りお参りいただき、みなさんとご一緒に、聞法させていただくご縁がありますことを心より願っております。　南無阿弥陀仏……

燧土勝徳